

## 中島敦『山月記』を読む

——時代を見つめる作者の眼—— (二)

山名 順子

キーワード・中島敦 『山月記』 『光と風と夢』 戦争 文学

### 要旨

昭和十七年二月に「文学界」誌上で発表された中島敦の『山月記』は、中島敦の代表的作品である。のみならず、戦後まもなく教科書に採用され、以来国語科教科書の定番教材として重視されつづけたことから、作品研究および教材研究の双方の視点から継続的に研究されてきた。一方で本作品は「人間存在の不条理」や「形而上学的不安」、「詩人としての悲劇」をコードとした中島敦自身の「私小説的作品」との類似に注目されることが多い。筆者は前稿にて、平成一〇年以降に隆盛した中島敦の作品と〈戦争〉との関係に注目した論に沿い、「自我の物語」としての『山月記』論を排除したうえで作中の〈文字〉〈文学〉〈歴史〉といったコードに注目しながら本

作品を再読することを試みた。その結果、『山月記』を含む作品群『古譚』にもまた、当時激化していた戦争や、戦時下の日本のありかたへの批判意識が含まれている可能性を指摘した。

本稿は、前稿の結論を踏まえ、主人公の李徴が虎に変化する理由を模索する。そのうえで、『山月記』が戦時下における文学あるいは文学者のとるべき態度に対する中島敦の理想と苦悩を描いた〈自我の物語〉である可能性を示唆するものである。

### 一、はじめに

中島敦の短編小説『山月記』は、敦のデビュー作品として、雑誌『文学界』一九四二年(昭和十七)二月号に、短編『文

字禍』とともに、『古譚』という総題を付されて掲載された。戦後から現在にいたるまで教科書教材として採用された本作品は、敦の代表的作品として認識され、作品・教材の双方から精力的に研究されている。

筆者は前稿で、「人間存在の不条理」や「形而上学的不安」、「詩人としての悲劇」をコードとして、敦の「私小説的作品」である『狼疾記』『北方形』『かめれおん日記』などの類似を解釈する従来の研究をいったん措き、平成一〇年以降に発生・流行した敦の作品と戦争との関係に注目した論に沿って、『山月記』にもまた時局への批判意識が包含されていることを指摘した。

子 順 名 山

具体的には、『古譚』全編を通じたテーマである〈文字〉〈文学〉〈歴史〉という視点から『山月記』を読み直すことで、中島敦が戦争に無関心ではなく、『山月記』を通じて、戦時下における日本のあり方への疑義、とくに思想言論統制への批判を示した可能性を見出した。また、『山月記』をはじめとする『古譚』全編において、物語における〈現在〉がいずれも国情の不安定な時代であり、軍国主義下あるいは戦時下にある国や地域を舞台としていることにも注目した。この視点から敦の作品群を俯瞰すると、南洋行直前から遺稿までの作品の多くに『山月記』にある時局への批判と同様の思想を示したと思しき記述が散見する。このことは敦が従前の評価

とは裏腹に時局に強い関心を持っていた証左となる。一方で『山月記』を時局への批判ととらえるならば、主人公の李徴が〈虎〉に変化した理由をどのように説明すべきか疑問が残る。

『山月記』はプレテクストとして『人虎傳』を持つ。『人虎傳』の作中、李徴は〈虎〉に変化し、『山月記』の李徴同様に苦悩する。そこで、本稿では、まずプレテクスト『人虎傳』と『山月記』の李徴・袁倅像を比較し、そのうえで〈虎〉が周辺諸国に対する侵略破壊活動の象徴であると同時に、李徴の苦悩が、時局への疑念や戦時下の政策への疑問を感じながらも、従わざるを得ない人々の苦悩である可能性について考察したい。

## 二、『山月記』とプレテクスト『人虎傳』

『山月記』が『人虎傳』というプレテクストを持つ事は、すでに諸先学によって明らかにされており、作品執筆の際に捨象された事項についても多くの論がある。ここでは、李徴と袁倅それぞれの人物像について、『山月記』と『人虎傳』にみられる相違点を指摘し、『山月記』における李徴の人物造形に見られる作者の意図を探る。

## 1、登場人物の造形に見える差異

### ①李徴

李徴の人物設定における最大の変更点は、「隴西の李徴」が、「皇族」から「郷党の鬼才」と書き換えられた事である。戦時下の日本で、「据傲」な敗者と見える李徴から「皇族」という性質を捨象した理由が当局の検閲を避ける目的であることは容易に想像がつく。では、『人虎傳』にいう「隴西の李氏」とはどのような性質をもつものであろうか。

隴西李氏は名族である。一方、唐の皇家「李氏」は、実は出自不明の一族であった。しかし、当時の人心を左右するものは皇帝の出身家格であったため、皇家「李氏」は自らの血筋を正当化するため、名族である隴西李氏に同姓付会したとされる。しかも両『唐書』<sup>(3)</sup>における「李氏」の家系図は李氏の祖を老子(李耳)にまで求めており、特に『新唐書』では、皇帝の家系図「宗室世系表」について、「老子にはじまり高祖李淵にいたる一〇〇〇年以上にわたる綿々たる系譜が記されて」<sup>(4)</sup>いるという。

既に指摘されているように、中島敦は漢学の家系に生を享け、その作品にも中国古典に取材したものが少なくない。唐の皇族の血脈の不透明性についても、知識があった可能性は高い。当時の日本では浪漫派に『古事記』や『日本書紀』といった「万世一系」の皇統の正当性を主張する史書が重視

されていたが、これらの史書にも皇統の不透明性が窺える箇所が散見する。この点は、両『唐書』における唐「李氏」の血脈の不透明性に通じる箇所である。一方、唐「李氏」の同姓付会が明らかに血脈の偽造であるが、李徴の出自である名族「隴西李氏」は偽造に積極的な関わりを持つわけではない。しかし、ここでは、「隴西李氏」が〈歴史の偽造〉に囚らずも手を貸している点に注目したい。『人虎傳』では明記されている名族の出自や皇統の正当性の証明を、敦は『山月記』では敢えて捨象した。これは、前述のように「皇族」という表記を自主的に規制した結果であると同時に、主人公の李徴が、曖昧な「皇統」の隠蔽工作に意図せず協力した一族に出自を持つことを殊更に紙面から排除した可能性の一端であると考えることができないのではないだろうか。<sup>(5)</sup>すなわち、『山月記』の李徴が主人公として取り上げられた背景には、当時の日本にあつて、激烈な思想・言論統制や政策に従うことで、自らの意図とは無関係に政府に協力の姿勢を示す日本国民の姿が投影されている可能性が透けて見えるのである。<sup>(6)</sup>

### ②袁倬

『山月記』の袁倬は、虎による遭難を示唆する駅吏に対し、「供廻りの大勢なのを待み、駅吏の言葉を斥け」という態度をとっている。この箇所は、『人虎傳』では以下のように

記述される。

袁怒りて曰く我は天子の使にして後騎極めて多し。山沢ともまはりの獸能く害をなさんやと。<sup>(8)</sup>

ここには、袁愆が馭吏の言葉に怒り彼を叱咤する姿が描かれる。袁愆は自らの安全の論拠を、自身が「天子の使」であること、すなわち天子の権力にあるとされていることがわかる。天子の使者としての強い矜持と信念に基づいて職を全うすることを重視する人物造形は、戦時下の日本において好ましい人物像であると考えられる。しかし、敦はこの部分を捨象し、

子 順 名 山

「性狷介」な李徴と唯一交流を持つことのできた温和な性質を持つ高級官僚として袁愆を描出している。<sup>(9)</sup>『山月記』の袁愆は過去に「性狷介」であるため交友関係に恵まれなかった李徴と交流し、物語の中では〈虎〉と化した友を差別せず、「悲しく」見守る〈人間〉として描かれる。また、『人虎傳』

の袁愆が持っていた、天皇を戴く政府の一員であるという選民意識や、その権威に任せて身分の劣る人間に激する性質を持たない、あくまでも理知的で温和な人物として造形された。

前項で述べたように、李徴が国の政策を後押しする国民を象徴するとすれば、袁愆はその姿を悲しみ、見守るしかすべを持たない知識層や高級官僚である可能性を持つ。例えば、

『山月記』執筆当時の内閣総理大臣近衛文麿は、華族出身(10)であり、京都大学哲学科を卒業した知識人でもあった。近衛

は、昭和三十七年（一九一二）六月の第一次内閣発足時に治安維持法違反の共産党員や二・二六事件の逮捕者を大赦しようとするなど温和な路線を示したほか、就任一ヵ月後の昭和三十七年七月七日に発生した盧溝橋事件に際して事件不拡大の方針を採り、善隣外交を訴えたが、政策は戦争へと転落していった。また、当時は思想統制が激化し、人々は地位や職位に関わらず舌禍・筆禍を受けた。大学に在籍する学者や、文壇も、思想統制の激化によって本心を隠し、あるいは否応なく国策に加担する必要に迫られたといえよう。

敦は、戦争の歯車になるという「さだめ」に陥ることを嘆く人々の訴えや、歯車としての日本人を生み出す教育への危惧、人間としての心を持ちながらも、悪化する現況を悲しく見守ることしかできない高級官僚や知識層の姿を、李徴と袁愆に投影したのではないだろうか。

以上の点から、『山月記』の登場人物の造形に際して捨象された部分には、当時の国内事情と関連する内容が含まれている可能性が窺える。少なくとも、敦が国体と直接的にかかわる表現を意図的に排除し、思想統制を避ける意図を持っていた可能性は強いと推測できる。では、『山月記』において、李徴はなぜ〈虎〉にならねばならなかったのだろうか。

## 2、〈虎〉になった李徴

李徴が〈虎〉になった理由については、既に諸先学によって論じられてきた。論の傾向は四つに大別できる。

- (1) わからない（作品中の李徴の言による。）
- (2) 臆病な自尊心・尊大な羞恥心<sup>11)</sup>
- (3) 妻子よりも詩業を優先させるなどの非人間性<sup>12)</sup>
- (4) 力量の不足

これらの分別に相当しないものとして、「虎とは心理学的には完璧なナルシストの暗喩である」<sup>13)</sup>「李徴の詩業への物狂おしい情念が外在化した姿である」<sup>14)</sup>という説もあるが、これらの主張はすべて「詩」が根本的な原因とするものである。前稿でも述べたように、『古譚』は〈文字〉〈文学〉〈歴史〉をテーマとしてもつ作品群であり、『山月記』における李徴の苦悩の一因が「詩」や彼の「詩業」にあるという点には疑いの余地がない。

一方で木村瑞夫氏は、李徴による三つの答え(1)(2)(3)すべてに注目しながらも、これらは「李徴の神観の表出である」と述べた。つまり、李徴の変身は超自然の力によるものである<sup>15)</sup>と言っているのである。『山月記』が戦時下の日本を諷する内容を秘めていると仮定し、李徴が虎に変じた原因を木村氏の言う「超自然の力」、すなわち「神」の業に求めた場合、当時の日本における「神」すなわち国体である〈天皇〉あるいはその

存在に付随する〈天皇制〉に注目せざるを得ない。李徴が虎に変えたものは、果たして〈天皇〉の力なのであろうか。

### ①「ノート第八」から見る〈虎〉

ここでまず、中島敦にとつて、〈虎〉がどのような動物であるかを確認するため、「ノート第八」の記述を引用する。

魂アル動物Ⅱキリン、roan、象、犀、猪

魂ノナイ動物Ⅱ獅子、豹

この記述に〈虎〉は含まれないが、「魂アル動物」と「魂ノナイ動物」を単純に分別すると、「魂アル動物」は草食動物、「魂ノナイ動物」は肉食動物ということが出来るだろう。ここで〈虎〉は獅子や豹と同様、肉食動物であることから、仮に「魂ノナイ動物」として考えることにする。肉食動物は人を含めた動物を喰らうが、これは相手の「死」を招く一種の破壊行為であるといえる。李徴が〈虎〉に変身することはプレテクストの『人虎傳』で既定されていたが、『山月記』においてはその〈虎〉がただ虎であるというよりも、肉食動物すなわち「魂ノナイ動物」である点をより重視すべきではないか。

『山月記』の中で、〈虎〉になった李徴が初めて害して食したのは兎である。プレテクストである『人虎傳』では、人間の女性を喰ったとされているが、敦がこの部分を捨象した理

由にも前述の「魂アル動物」と「魂ノナイ動物」の分別が意味を持つと考えられる。すなわち、「獣」であり「魂ノナイ動物」になった李徴が喰らうのは、同じ「獣」でありながら、虎よりも非力で「魂アル動物」である必要があったということである。時局に対する批判意識を作品のコードとして考えるならば、虎による兎の殺害と捕食は、日本による周辺諸国の侵略、特に国力で劣る国々の侵略を寓意していると考えることができるのである。

## ②日の下における〈虎〉の苦惱

作中において、李徴は自らの苦惱について以下のように述べる。

己の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。

この点は、『文字禍』の「書物狂の老人」に関する以下の描写と共通すると思われる。

ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に――全く羨ましいほど――いつも幸福そうに見える。勝又志保氏は「書物狂の老人」を「《信》の人」と定義した。

つまり、宗教や思想などに対し、疑いを持たずに〈信〉じることのできる人物である。これを『山月記』に置き換えて考えると、『《信》の人Ⅱ虎』であると考える事が可能である。

虎になりきってしまうということは、〈自らの考えをもたず、国家の方針に何の疑問も抱かない人物〉になることではないだろうか。満州事変以降、日本では政府の主導に基づいて、文部省の手で教育の戦時体制が強化され、生徒自らの意思とは全く無関係に、〈虎〉を生み出す機構が整備されていた。李徴が訴えているように、李徴はいまだ虎になりきる事に抵抗を感じている。しかし、その思いは、既に〈虎〉になりきってしまったかつての〈人間〉にも、李徴を〈虎Ⅱ日本の一員〉と認識している〈他の獣たちⅡ力で劣る周辺諸国の人々〉にも、袁倭に代表される心ある〈人間〉にも届かないのである。

さらに、物語の時間が「夜明け」に設定されていることに注目したい。このことについてはすでに、「怪異性の強調要素」<sup>(17)</sup>「夜と昼との境目としての明け方近く（中略）この昼とも夜とも区別のつかない非日常的な時間帯では、（中略）袁倭にとっても読者にとっても「超自然の怪異」が起こって何ら不思議ではない」との指摘がある。しかし、夜明けと共に「酔わねばならぬ時が（虎に還らねばならぬ時が）」やってくる、ということは、太陽の下では虎であらねばならないことを暗示している。それは太陽の下、すなわち日のもと日本においては、周辺諸国を制圧する帝国軍の一員であるべきだということに他ならない。



敦は、李徴を〈虎〉に変身させる事によって、いまだ国策に疑問をもつ日本人の苦悩を描こうとしたのではないか。彼らにははじめ、「俗悪な大官」である国家に従属する事に抵抗を感じていたが、思想や言論の自由が圧迫されるに従って、気がつけば日本の軍事政策の一員になっていた。彼らは国策に疑問をもたねば幸せだろ、と考える。しかし、一方で、疑問を持たずに破壊行為を行うことにも恐怖を感じているのだ。彼らは、反国家的な考えをもっていたが、時世がその発表を許さなかった。今やその真情を伝える手段も持たず、一個人としての存在も後世には残らない。そして、そのような考えを持っている事すら、軍の監視下においてはなかった事にせざるを得なかった。

以上の点から、『山月記』の李徴を〈虎〉にした原因は、天皇を戴いた政府と当時の日本の国策であると結論づけた。〈虎〉となった李徴の詩には、詩吟も出来ず吼えることしかできない苦しみが述べられる。この一句には、〈文字〉や〈文学〉における自由な表現が規制され、自らの思想を周囲に伝達も理解もされることのない人々と、中島敦自身の苦しみが込められているといえよう。

### 三、中島敦の苦悩 ―『光と風と夢』を例にして―

#### 1、南洋での失望

前稿では『古譚』四編について「つねに〈文字・言葉〉をめぐって展開する」<sup>(19)</sup>とする佐々木充氏の指摘をうけ、作者である敦が〈文字〉〈文学〉〈歴史〉といったものに対する自身の意見を作品中に込めた可能性を指摘した。特に、川村湊氏のいう「原始社会が「文字」を持ち始めることと、「権力」の発生することは同時的」<sup>(20)</sup>である点に注目したとき、敦が、〈文字〉を利用し、「書き」「残す」事が出来てはじめて、自らの主張を広く訴えるだけでなく、後代に遺すことが可能であることを強く意識している可能性が見えてきた。このことは『狐憑』の結末部で、〈物語〉をして人々を惹きつけてきた主人公のシャクが、所属する「ネウリ部落」の住民に「喰はれて了つた」ことでその〈物語〉ともども消滅し、「誰も知らない」存在となったこと、また、『文字禍』の結末部で博士が粘土板に押し潰されて圧死するのに対し、粘土板の文字はニネヴェの図書館が発掘されることによって〈再生〉することができるとも表れている。文字による〈主張〉の力は戦時下の日本でも利用され、文壇にあつては文学報国会が戦争を肯定し、〈歴史〉の面では記紀による皇統の正当性が政府主導で強力に印象づけられた。当時において〈文字〉を

持つということは、〈永続性〉を持ち、〈権力〉の在処を操作する力を持つということでもあったといえる。敦がその遺稿『章魚木の下で』の中で、当時の日本で流行している文学を「代用品」と呼んだのは、戦争のプロパガンダ的なものとして利用されている〈文学〉への嫌悪と危機感を示していると思われる。敦は昭和十六年十一月九日付の妻たかへの書簡の中で、たかが送った雑誌類を「ガツ／＼」読んだことに触れたうえで次のように述べている。

但し、之からは「文藝」と「新潮」<sup>シンチョウ</sup>と「文學会」の三つだけで結構だ、といふことも、ついでに。何しろ旅行中は、内閣が変つても、しばらく知らないでゐるんだから、暢気<sup>シ</sup>なものさ。<sup>(21)</sup>

このように〈文字〉を持つことや〈文学〉、〈歴史〉の操作に対する敦の態度は、多くの作品や私的な文章の断片に表れているが、同時に南洋に取材した作品群では、南洋人を一段下において〈教化〉しようする日本人の態度を批判している。敦は他の小作品や『李陵』においても日本の支配体制への疑問ととらえうる表現を多く残している。日本の南洋支配への敦の疑念と失望は、前出のたか宛ての書簡や、赴任先の南洋から父田人に宛てた昭和十六年十一月六日付の書簡の中にも表れている。

所で、その土人達を幸福にしてやるといふことは、今の

時勢では、出来ないことなのだ。今の南洋の事情では、彼等に住居と食物を十分に与へることが、段々出来なくなつて行くんだ。(中略) なまじつか教育をほどこすとが土人たちを不幸にするかも知れないんだ。オレはもう、すつかり、編纂の仕事に熱が持てなくなつて了つた。土人が嫌<sup>き</sup>ひだからではない。土人を愛するからだよ。僕は島民(土人)がスキだよ。南洋に来てゐるガリガリの内地人より、どれだけ好きか知れない。<sup>(22)</sup>

たゞ、教科書編纂者としての収穫はが頗る乏しかったことは、残念に思つてをります。現下の時局では、土民教育など、殆ど問題にされておらず、土民は労働者として、使ひつぶして差支へなしといふのが為政者の方針らしく見えます。之で、今迄多少は持つてゐた、此の仕事への熱意も、すつかり 失せ果てました。もつとも、個人の旅行者としては、多少得るところがあつたやうに思ひます。<sup>(23)</sup>

敦は日記の中でも、南洋の子供たちに日本語を教える日本人教師たちの粗暴な態度への非難をたびたび示している。敦が、戦時下における自身の立場やその仕事の意義に苦悩していたことの証左といえよう。



## 2、『光と風と夢』——ステイブンスへの憧憬——

『文学界』昭和十七年五月号に掲載された『光と風と夢』（原題『ツシタラの死』）は、英国の作家ロバート・ルイス・ステイブンスを主人公とした中編小説である。主人公のステイブンスは肺結核の療養のために転地を繰り返した末に南洋サモアに辿り着き、その異文化を愛して土地の民と親交を持ち、その体験を作品に残したが、虚弱な体質のため夭折したなど敦との共通点も多い。『光と風と夢』は敦の南洋行以前に著された作品であるため、南洋行や南洋に取材した作品へのステイブンスの影響については慎重な考察が求められるが、敦のステイブンスへの傾倒を十分に示している。<sup>(24)</sup>

荒正人は本作品について、「戦争謳歌一色に染められていた」<sup>(25)</sup>太平洋戦争二年目の文壇において、無難な題材であったとしたうえで次のように指摘する。

後者（筆者注…『光と風と夢』）は、R・L・ステイブンスに寄り添いながら、サモア島の土民との交渉を描くことで、西欧の近代主義を批判し、文明を軽蔑し、原始の自然を賛美することができた。その結果、近代主義の側からの戦争批判からも自由であった。むしろ、中島敦にそんな大それた政治的意図はない。ただ、時局がら、そういう読まれ方もされただけにすぎぬ。（中略）芸術家中島敦にとって、サモア島のR・L・ステイブンス

は第二の自我であり、理想的自我であった。R・L・ステイブンスを通じて、新しい自己を獲得しようとする努め<sup>(27)</sup>ている。

荒氏はさらに敦の作品群を概観したうえで、『古譚』について「人生への複雑な意味を書き添えた」ものとして、「根強さと激しさが無い」「最も良質な芸術愛好主義があるだけである」と評価した。<sup>(28)</sup>一方で、川村湊氏は敦を「文字」に病んだ人間<sup>(29)</sup>と捉え、『光と風と夢』における「ツシタラ」の語に注目し、以下のように述べている。

さて、こうした無文字社会の南海の楽園を墓石にやってきたのが、「文字」を持っていた人間、ドイツ人であり、イギリス人であり、フランス人であり、——そこにはまた日本人も「文字」をもって南洋の侵略に加わったのだ<sup>(30)</sup>が——に船に大砲とあらゆる者を載せてやってきた。文明人の仲間だったのである。

川村氏は、敦が『光と風と夢』の主人公としたステイブンスとの共通点を多く持ち、彼に傾倒していたことを挙げながら、『光と風と夢』には敦自身の小説観や文学論が示されているとした。また、川村氏は、本作品には敦の持っていた「無文字社会」への憧憬と、彼自身が「国語編集書記」として南洋へ「文字」を持ち込み、「無文字」の世界を汚染したことへの葛藤が語られていると結論づけている。<sup>(32)</sup>先に挙げた

「ツシタラ」は語り部の意味を持つ南洋語であり、『光と風と夢』では、ステイブンスンの死に際して老酋長が「トファ（眼れ）！ ツシタラ」と発言している。川村氏の論に随えば、〈文字〉と〈文学〉に情熱を燃やし、ステイブンスンへの偏執的な憧憬を抱いていた敦が自らの作品中に自己を投影したと考えることは不自然ではない。<sup>(33)</sup>さらに、川村氏は昭和十六年九月二十三日付の息子桓に宛てた葉書にある次の文言を挙げている。

子  
順  
名  
山  
土人のうちには犬とねことぶたとやぎとはとりとあひ  
るとがゐます。(中略)その中で、一ばん犬がゐるばつて  
ゐます。犬がゐない時はぶたがゐるさうです。犬もぶ  
たもゐないとやぎがゐるさうです。ぶたがゐるなん  
て、すいぶんをかしいな！

川村氏はこれを、ミクロネシアの宗主国がスペインからド  
イツを経て日本の南洋庁管轄へと変遷したことの寓意である  
とする。「魂」の有無で動物を分け、『山月記』において李徴  
を〈虎〉へと変化させた敦にとって、御伽噺めいた動物たち  
の力関係に列強の力関係を仮託するのは自然なことであつた  
かもしれない。

ここで、『山月記』研究史に立ち戻り、昭和三十年代に、  
敦の作品が作家自身の「自我」をモチーフとしたという論  
が中心となつたことに注目したい。深田久弥氏は「古譚」

では、作中人物の言葉や動作は、そのまま中島敦の感慨であ  
り、彼が採りそうな行動である。<sup>(33)</sup>と述べ、大西雄二郎氏は  
「中島敦は虎に化けることで自ら恥じ入る事もあえて言い得  
た。」<sup>(34)</sup>とし、『山月記』は敦の自己否定と「これまでの息苦し  
い記録」である<sup>(35)</sup>と断定した。この傾向は昭和四十年代にも鷺  
只雄氏によって継承され、『古譚』は「宿命的な『自我』を  
テーマとして形象された作品」<sup>(36)</sup>と評価された。鷺氏と同時期  
に佐々木充氏は『山月記』を敦の「自我」の物語であるとす  
る説を排除し、「永遠への願望という根源的な人間欲望」に  
つながっていることを指摘したが、その一方で『山月記』を  
「詩をつくること」にとらわれてしまった人間李徴の劇的な  
運命を、虎と化しながらなお人間の心をもつという臨界状況  
の下に描く佳作<sup>(37)</sup>と評価した。これらの論考に随って、以降  
の『山月記』論の多くは「虎（李徴）＝中島敦」という見方  
によるものとなつたことは、前稿にも述べた通りである。石  
原千秋氏の指摘にあるように、現在に至るまで、『山月記』  
研究には依然として「国語教育的な読みが文学研究に偏在し  
ていながらはつきりと自覚されずにいる」<sup>(38)</sup>傾向があり、〈文  
学〉〈文字〉〈歴史〉に関わる中島敦自身の苦悩が作中に描か  
れるという分析が繰り返される。

しかし、筆者はここで敢えて中島敦が『山月記』の李徴に  
自己を投影したことを改めて主張したい。それは、〈文字〉

や〈文学〉という創作に拘り、苦悶する姿ではない。『山月記』の李徴には、戦時下において〈文学〉と自身のあるべき姿や信条を見失い、なすべきことを求めて『光と風と夢』に描いた、自らの理想像「ステイブンスン」に憧れて南洋に居所を求めた敦の、戦時下の日本人としての苦悩が示されているのである。敦は、遺稿『章魚の木の下の』に、次のように書いている。

作家という名前は返上して、戦時下の国民の一人として戦争遂行に必要な実務にたづさはればいいのではない。文学者の戦場は飽くまで書齋にあると唱へる人が多い。現在も尚旺盛な創作熱にとり憑かれてゐる人や、大いに自己の文学を以て御奉公し得る自信のある作家なら、充分にそれを主張する資格がある。併し、全然書けなくなったり、事故の作品に不安を感じたりするやうな人迄が、今迄文学をやつて来たからといふそれだけの事実に引きずられて、無理に書齋に囁りついてゐるようなことはない。人手の足りないこの際、宜しく筆を捨てて何等かの実際的な仕事に就いた方が、文学の為にも国家の為にもならうと思ふのである。

心身の健康を求めて南洋行を決めた敦は、現地の気候にも、植民地政策の在り方にも裏切られた。帰国後の時局や文壇に対する失望は、諸先学の指摘にある通りである。李徴やツシ

タラの苦悩は、解消されることはなかったのである。

#### 四、結論と展望

本稿では、『古譚』全編を通じたテーマである〈文字〉〈文学〉〈歴史〉という視点から『山月記』を読み直した前稿での試みを受け、中島敦が戦争に無関心ではなく、時局、特に思想言論統制への批判意識を抱いているという前提のもと、李徴が〈虎〉に変身した理由を考察した。

その結果、本作品が〈自我の物語〉である可能性が強いと結論づけるに至った。従来の研究で指摘されている「自我の物語」が「詩」を根源とするものであるのに対し、本稿における〈自我の物語〉は、戦時下の日本で望まぬ役割を担わざるを得ない日本人々や中島敦本人の苦しみをさすものである。

〈虎〉とは、同じ人間であり固有の文化を持つ周辺諸国を侵略破壊する当時の日本を象徴するものであり、そのことは、李徴が〈虎〉として喰らった生物が、『人虎傳』では人間の女性であるのに対し、『山月記』では兎である点にも表れていると指摘した。また、〈虎〉となった李徴の詩にある、詩吟も出来ず吼えるだけである、という表現には、文学における自由な表現が規制され、今や理解されないうめきを洩ら

す事しか出来ない文学者としての中島敦の苦しみであると解釈した。『古譚』に一貫する思想・言論統制批判が『山月記』において顕著に現れた例として注目すべきであろう。

中島敦の作品は決して多くはない。しかし、『光と風と夢』をはじめとして、本稿で触れることのできなかった多くの作品に、同様の思想が散見することは既に述べた通りである。今後の課題とし、攷筆したい。

(准教授 日本近代文学)

注

- (1) 山名順子「中島敦『山月記』を読む―時代を見つめる作者の眼―(一)」、『川村学園女子大学紀要』二七、平成二十八年三月。以下「前稿」と表記する。
- (2) 小野友子「『山月記』論序説―制度としての教科書」、『國學院大學大学院文学研究科論集』二二、平成七年三月などに指摘がある。
- (3) 中国の二十四正史のうち、唐代の史書は『旧唐書』『新唐書』の二書ある。『山月記』の舞台となった時代が二つの正史を持つことは今後考察の余地がある。
- (4) 愛宕元「唐代前期の政治」、池田温他編『世界歴史大系 中国史二 三国と唐』、山川出版社、平成八年七月
- (5) 注(4)前掲書において、愛宕氏はこの同姓付会について「馬脚を現した」と評し、唐書における李氏の正当性を否定した。
- (6) 中島敦が登場人物と実在のモデルとを結びつけるにあたって隠微な表現を用いる可能性については、勝又志保氏が『文字禍』の主人公である老博士ナブ・アヘ・エリバの老齢と、老博士のモデルと目される津田左右吉博士が七十歳であることに共通点を見出した点を例に挙げることができる。(勝又志保「中島敦『文字禍』論―時代を諷するアレゴリー」、『国文』九二、お茶の水女子大学国語国文学会、平成十二年一月)
- (7) 唐代には道教が重用されたとの指摘があり、『山月記』執筆当時に記紀において皇統の祖とされた天照大神が強く信仰され、国家宗教としての神道が重視されたことに通じる。
- (8) 李景亮「入虎傳」、『国訳漢文大成十二 晋唐小説』、国民文庫刊行会、大正十四年
- (9) 従来の研究において、袁修は李徴が心を許す事のできる性格を持った理想的な聞き手であるとされ、久保昌之氏は袁修の聞き手としての能力を「カウンセラー」と評価した。(久保昌之「聴き手」袁修洞察の援助者)、『静岡近代文』十四 平成十一年十二月)
- (10) 敦が『山月記』執筆の際に、李徴が皇族の出である事を捨象したのは、執筆当時の内閣総理大臣近衛文麿が華族出身であった事も一因であった可能性がある。
- (11) 鷲只雄「中島敦の『古譚』について」、『言語と文芸』五〇、昭和四十二年一月
- (12) 佐々木充「『山月記』論―『古譚』の世界―」、『国語国文研究』三一、昭和四十年九月
- (13) 真杉秀樹「差異」としての変身―『山月記』論、『解釈』三七・一〇、平成三年十月
- (14) 秋山公男「『山月記』―情念の発光」、『文芸研究』一四八、平成十一年九月

- (15) 木村瑞夫「中島敦『山月記』論―李徴にとつての〈神〉―」、『国語と国文学』七一・三 平成六年三月
- (16) 勝又志保「中島敦『文字禍』論―時代を諷するアレゴリー―」、『国文』九二、お茶の水女子大学国語国文学会、平成十二年一月
- (17) 藤村猛「『山月記』論」、『安田女子大学紀要』二〇、平成四年二月
- (18) 高橋龍夫「『山月記』―その構築美の世界―」、『稿本近代文学』一八、平成五年十一月
- (19) 佐々木充「『山月記』―存在の深淵―」「中島敦の文学」昭和四十八年六月、桜楓社（初出「『山月記』論―『古譚』の世界―」『国語国文研究』三一、昭和四十年九月）
- (20) 川村湊「『無文字社会の誘い』―中島敦と〈アジア〉的なもの」、勝又浩・木村一信『中島敦 昭和作家のクロノトポス』、双文社出版、平成四年十一月
- (21) 「書簡」二二八、『中島敦全集』第三卷 六二九頁。  
ここで敦が誌名を指定した真意を知るには、当時の雑誌の内容を精査する必要があるが、昭和十六年十月十八日に発足した東条英機内閣に何らかの関連があると思われる。
- (22) 注(21)に同じ
- (23) 「書簡」二二七、『中島敦全集』第三卷 六二七―六二八頁。  
敦はこれにつづけて追伸の中で以下のように記している。南洋の気候による心身の不調を訴える文面ではあるが、前出の書簡二二八において南洋の民への親近感を述べていることから、今後研究の必要があると考ええる。
- 一日も早く今の職をやめないと、身体も頭脳も駄目になつて了うと思つて焦つてをりますが、今の所一寸抜けられさうもありません。パラオに落ち着かないで、いつも旅行に
- ばかり出してあてくれ、ば、喘息のためには良いのですが、何しろ不断のこの暑熱では、頭の方もちません、記憶力の減退には我ながら呆れるばかりです、(中略)とにかく、今のパラオのやうな生活を一年も一年半もつゞけたら、身体はこれ、頭は**ボ**ぼけ、気は狂つて了ひさうです。
- (24) 本稿の執筆後、ゼミ生の吉田理紗氏より、酒見優里氏の論考（『酒見優里「光と風と夢」における中島敦の反戦思想』、『清泉語文』、清泉女子大学日本語日文学会、平成二十四年）について教示を受けた。ここに記して感謝いたします。
- (25) 敦のステイブンスン傾倒は、『光と風と夢』にとどまらない。徳田進氏は『山月記』における『ジキル博士とハイド氏』の受容を示唆している（徳田進「中島のR・L・スチーブンソンの受容―『ジキル博士とハイド』の投影―」、『山月記』の比較文学上の新考察」、ゆまに書房、平成五年、一二六頁）が、敦が『山月記』執筆において、ステイブンスンの著作を意識した可能性は極めて強いといえる。
- (26) 荒正人「中島敦論」、『中島敦全集』補卷、文治堂、昭和三十六年（『中島敦全集』別卷、筑摩書房、二〇〇二年、二九頁）。
- (27) 注(26)に同じ
- (28) 注(26)に同じ
- (29) 川村湊「ツシタラ・アツシの物語」、講談社文芸文庫『光と風と夢・わが西遊記』解説、講談社、平成四年（『中島敦全集』別卷、筑摩書房、平成十四年、一六六頁）。
- (30) 注(29)に同じ
- (31) 注(29)に同じ
- (32) 『光と風と夢』は、編集部主導による自主規制の末に発表された。河上徹太郎は、深田久弥に宛てた書簡の中で、『光と風と夢』

の原型『ツシタラの夢』について以下のように述べている。

現代人へのアレゴリーたり得、且つかういふ時勢の下で特殊の魅力をもつてゐる筈である。然しそれを余り大つづらに鼻の先へぶら下げ過ぎると、この時勢では厭気がさしてくる。軽く匂はせるだけで我々には十分察しがつくものである

(河上徹太郎書簡 深田久弥宛 昭和十七年、『中島敦全集』別巻、四七六頁)

自主規制の一方で、改稿後も「一八九一年九月×日」の条には、島の中で発生した「怪しい噂」を白人政府打倒のための「戦争」の前兆と捉え、期待する島民たちの姿が描かれる。これは『文字禍』にあらわれた内乱後の「怪しい噂」の発生に通じるものであり、再考の余地がある。

(33) 深田久弥「中島敦君の作品」、「ツシタラ第二輯」中島敦全集第三卷月報 昭和三十四年九月三十日

(34) 大西雄二郎「中島敦の側面」『ツシタラ第三輯』中島敦全集第四卷月報 昭和三十五年六月

(35) 注(34)に同じ

(36) 注(11)に同じ

(37) 注(19)に同じ

(38) 石原千秋「言葉をめぐる寓話」『海燕』十一・一〇、141234

### 凡例

本稿における中島敦の作品、日記、書簡本文はすべて『中島敦全集』全三巻・別巻、筑摩書房、平成三年 によった。なお漢字は新字体に改め、ルビは必要に応じて省略した。

### 補記

本稿における引用文の中には、現代では適切でないと思われる表現が含まれる場合もありますが、原文を尊重し、そのままの表現を使用しております。ご了承ください。